

口頭発表 | 口頭発表：家政教育

📅 2025年6月1日(日) 15:10 ~ 16:10 🏢 B会場 (都市科学部講義棟102)

## 家政教育

座長：小林 陽子 (女子栄養大学)

### ◆ 若手研究者ポスター賞エントリー

15:10 ~ 15:25

[3B-05]

教科書における家庭科と他教科等との関連性を示す記述に対する小学校教員の認識

\*森 千晴<sup>1</sup> (1. 岡山大学)

---

15:25 ~ 15:40

[3B-06]

中学校「技術・家庭」家庭分野における将来展望に関する研究  
—「生活に関わる技術」に着目した授業実践より—

\*宮川 駿<sup>1</sup>、鈴木 明子<sup>1</sup> (1. 広島大)

---

15:40 ~ 15:55

[3B-07]

1958年の技術科から技術・家庭科成立までの経緯  
家庭科教育関係団体の運動

\*浅井 直美<sup>1</sup> (1. 全国家庭科教育協会)

---

15:55 ~ 16:10

[3B-08]

小学校・中学校家庭科における課題の設定

\*中里 真一<sup>1</sup>、田中 麻里<sup>2</sup> (1. 群馬県教育委員会事務局、2. 群馬大)

---

口頭発表 | 口頭発表：家政教育

2025年6月1日(日) 15:10 ~ 16:10 B会場 (都市科学部講義棟102)

## 家政教育

座長：小林 陽子 (女子栄養大学)

### ◆ 若手研究者ポスター賞エントリー

15:10 ~ 15:25

## [3B-05] 教科書における家庭科と他教科等との関連性を示す記述に対する小学校教員の認識

\*森 千晴<sup>1</sup> (1. 岡山大学)

キーワード：小学校教員、家庭科、他教科、関連性、授業実践

【目的】複合的で現代的な諸課題に対応するために、物事を多面的・多角的に捉える教科等横断的な授業が求められている。本研究では、小学校家庭科教科書に記載された家庭科と他教科等との関連性を示す記述について、小学校教員がどのように認識しているのか、授業実践に活用しているのか等を調査し、教科等横断的な授業構想への活用方法を検討することを目的とした。

【方法】O県内の各小学校へ調査協力依頼を行い、協力に同意した9市6町2村、25校の小学校へアンケート調査の説明書を送付した。アンケートはGoogle formsを用いて作成・収集した。説明書の送付数の合計は691部、回答者は192名、有効回答率は27.8%であった。

【結果】家庭科と他教科等との関連性を示す記述について、記述を認識していた教員は29.7%であった。認識していた教員の中で、記述を基に教科等横断的な授業実践を行った経験がある者は41.1%であった。認識していなかった教員に「この記載を見て、家庭科と他教科等との関連性について興味・関心が持てましたか」と問うたところ、「はい」と回答した者が88.7%であった。これらの結果から、教科書の記述により関連性について興味・関心をもつきっかけになること、教科等横断的な授業実践への一助となることが推察された。

口頭発表 | 口頭発表：家政教育

2025年6月1日(日) 15:10 ~ 16:10 B会場 (都市科学部講義棟102)

## 家政教育

座長：小林 陽子 (女子栄養大学)

15:25 ~ 15:40

### [3B-06] 中学校「技術・家庭」家庭分野における将来展望に関する研究 — 「生活に関わる技術」に着目した授業実践より—

\*宮川 駿<sup>1</sup>、鈴木 明子<sup>1</sup> (1. 広島大)

キーワード：中学校、家庭分野、将来展望、授業実践、技術

#### 目的

中学校学習指導要領 (2017) 家庭分野では、今後の生活を展望した課題解決能力の育成が求められている。前二報では、中・高校生を対象に、技術が進歩した未来生活を描いた年表を活用した授業実践を行い、自分事として未来の生活を予測しながら、技術革新を多面的に捉えていたことを報告した。本報では、中学1年生に対して、これまでの授業を改善した、「生活に関わる技術」に着目した授業を構想、実践し、よりよい生活の実現に向けた思考の深まりにつながったか検証することを目的とした。

#### 方法

H中学校1年生119名を対象に、2024年10月～11月の期間で4時間の授業を実施した。評価はワークシートの記述分析、評価規準は未来の生活と技術の関係性を考察し、よりよい生活の実現に向けて自分事として思考できているか等であった。

#### 結果

「今後の人生で大切にしたいことは何ですか」の問いでは、「技術と共存しながら自分の個性を大事にすること (64名)」「未来を考えながら楽しむこと (36名)」等の回答があった。また、「技術とどのように向き合うべきだと思いますか」の問いでは、「人間らしさを残しつつ、技術との共生が必要 (63名)」「技術発展による影響への配慮が必要 (25名)」「制限をかける等、適度な距離感が必要 (15名)」等の回答があった。これらの結果から、改善授業は多くの生徒がよりよい生活の実現に向けて、「技術」の多様な側面をより深く捉えていたと評価できる。

口頭発表 | 口頭発表：家政教育

2025年6月1日(日) 15:10 ~ 16:10 会場 B会場（都市科学部講義棟102）

## 家政教育

座長：小林 陽子（女子栄養大学）

15:40 ~ 15:55

[3B-07] 1958年の技術科から技術・家庭科成立までの経緯

家庭科教育関係団体の運動

\*浅井 直美<sup>1</sup> (1. 全国家庭科教育協会)

キーワード：技術・家庭科、全国家庭科教育協会、日本保育学会

【目的】1958年3月の教育課程審議会答申では、技術科を編成することが発表されたが、同年8月には技術・家庭科として成立した。このことが技術科教育関係者から「一夜にして改変された」と批判的に語られている。家庭科教育関係者はどのような運動を展開し、また家庭科教育の内容をどのように成立させようとしていたのかを各団体の資料を用いて明らかにする。

【方法】各関係団体の機関誌・会報誌等の文献調査を行う。

【結果】これまで、1958年3月に日本家政学会、日本教育大学協会第二部家庭科部門、全国家庭科教育協会（ZKK）が連名で請願書を作成・提出したことが明らかになっている。◎日本家政学会九州支部第5回総会の協議題として取り上げていた。◎ZKKは、機関誌『家庭科』に運動の詳細を示し、同年3月末には、家庭科の名称が残ることを情報として得ていた。◎日本保育学会会報第7号「中学校家庭科についての陳情」及び『幼児の教育』57巻11号の記事によると、当学会が作成した陳情書を、文部省初等中等教育局長内藤誉三郎他2名、教材等調査委員会職業・家庭科小委員長細谷俊夫、衆議院議員坂田道太文教委員長に手渡し、同年6月には、家庭科の指導内容に「保育」を残すことの要求が通っていた。◎全国家庭科教育協会は、1958年3月発行の『職業教育』において、「全人教育尊重」を要求して文部省他関係団体に陳情していた。

口頭発表 | 口頭発表：家政教育

2025年6月1日(日) 15:10 ~ 16:10 B会場 (都市科学部講義棟102)

## 家政教育

座長：小林 陽子 (女子栄養大学)

15:55 ~ 16:10

### [3B-08] 小学校・中学校家庭科における課題の設定

\*中里 真一<sup>1</sup>、田中 麻里<sup>2</sup> (1. 群馬県教育委員会事務局、2. 群馬大)

キーワード：家庭科、授業づくり、課題の設定

**目的** 家庭科、家庭分野の授業づくりにおいて、教師や教育実習生の多くが困難さを感じていることの一つに課題の設定がある。そのため、題材の課題を児童生徒が設定するのではなく、授業者が提示する実践や、題材の課題が設定されない実践を目にすることがある。本研究では、家庭科、家庭分野における課題とは何か、児童生徒が課題を設定するための教師の手立ての具体は何かを伝える講話内容が、家庭科、家庭分野の授業づくりについての理解の深まりや実践意欲向上へつながるかを検証することを目的とする。

**方法** 学校現場で家庭科の授業実践をしている小中学校教諭15名にはオンライン研修会で、家庭科免許取得を目指す大学生42名には大学の講義の中で、いずれも同様の内容でおよそ60分の講話を行った。講話後の感想や振り返りの記述をもとに分析を行った。

**結果** 小中学校教諭は、家庭科、家庭分野における課題の捉えと児童生徒が課題を設定するための教師の手立てが明確になり、すぐにでも実践できる実感を得るとともに、取組への意欲を高めた。特に、小学校教諭は、家庭科だけでなく他教科でも取り入れられる内容であると捉えた。大学生も、課題の捉えを明確にするとともに、授業観の転換の必要性や、教師の役割を見直す必要性を実感した。教師も大学生も授業づくりについての理解を深めるとともに、各立場に応じた今後の取組への意欲向上について一定の効果が見られた。